

# 朝日歌壇 俳壇



北村さゆり

〈構置く。〉

**短歌時評 一九七〇年代の短歌史** 山崎 聡子

大阪万博の開催、三島由紀夫の割腹、あさま山荘事件、沖縄返還、ロッキード事件……一九七〇年代という激動の時代に何が書かれ、語られていたのか。膨大な資料から紐解いた吉川宏志の『一九七〇年代短歌史』が出版された。

「政治の季節」から「経済の時代へ」。冒頭では、そんな時代に歌人たちが何に苦悩し、どんな方法論で歌を詠もうとしたのか、福島泰樹、佐佐木幸綱、岡井隆らキーパーソンの動向とともに記され

る。政治批判を暗喩的に表す前衛短歌の手法に限界が見えるなか、「日常を詠え、たまたま変革された日常を」と掲げた三枝昂之、時代に殉じた三島由紀夫らを哀悼しつつも「伝統のしきたりにびよ滞れなくなりながら、へにもかかわらず」へねばならずで走る以外、現代の歌人の生き方はないと吐露した佐佐木。開こうとした時代の熱が感じられる。

一方で、本書の本来の白眉は、これまで

で歴史として語られなかったことを掘り取ろうとする手付きにある。例えば、沖縄返還の年の全国紙の新聞歌壇には当事者の歌はほとんど掲載されていない。購読する人が少なかったという事情があるにせよ、中央に到達しないものはないものとされてしまう構造に筆者は立ち止まる。そのほか、女性歌人が切り開いた表現領域や、地方を拠点する媒体への手厚い言及は、歴史を多面体として捉えようとする執拗な意志に貫かれている。

歴史は流動するが、誰かが記すことで次の人が語り始めることができる。本書を皮切りに今について語りたい。(歌人

井上康明著「飯田蛇笏の百句」 明治45年の「ふるさとに雪に我ある大炉かな」から昭和37年の辞世の句「誰彼もあらず一天自尊の秋」までを収録。(ふらんす堂・1650円)

抜井諒一句集「残影」 第3句集。2021年頃から25年までの331句を収録した。「白靴の知らざる森の暗さかな」「玉虫を逃がして授業再開す」(角川書店・2420円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。(選りわけの仮目録)

キャンパスに羨びたくアン落ちていてゴッホのカケラの如く光りぬ (高松市) 樋口淳一郎  
春一番の拐いのこせし 一片の娘の喉仏「まっ白です」 (市川市) 山崎 蓉子  
退勤のあと準備をしてくれと迫る班長のかすかな涙 (浜松市) 尾内田太郎  
落日の輝きなるか余命宣告されたる夫のこの食欲は (京都市) 小西 すす  
亡き夫のシャツのボタンを掛け違へ残りし孔のくすりと笑ふ (大垣市) 立川 昌子  
瀬戸の春告げるバックの釘煮買入れ食いのように群がる吾も (筑紫野市) 桂 仁徳  
段ボールの空き箱空に向けて持つ春の光を詰めておくるがに (多摩市) 豊間根則道  
梨の木の元に寝かせた吾子の顔振り返りつつ交配急ぐ (西宮市) 市橋 昌巳  
歯科用の麻酔の在庫がないといふ着信音が夜道にひびく (神戸市) 松本 淳一  
一冬を水路工事せし人ら掻き消えにけり渡りのSMAN (水戸市) 檜山佳与子

【評】一首目、キャンパスにゴッホの黄のような情熱が埋もれているかもしれない。二首目、せめて、と気遣う焼き場の職員の言葉だろう。三首目、サービス残業をさせる班長こそ辛い。六首目、春を知らせる釘煮に群がる自分こそ魚のようだ。

開墾の苦勞を覆い隠すといふ棚田は真の山河へもどる (高松市) 木野 裕夫  
白鳥は掃り静かな庭へ出し巻トラックのタイヤを替える (山形県) 高橋まさじ  
十年の歳月はわれをそのかす太極拳の昇段試験 (安中市) 岡本千恵子  
タンチョウワツル、キツネにタヌキ人間もこの黒きソーラーパネルに怯む(多摩市) 柳田 主馬  
夕暮に町の小さなバスが来る休耕田の菜の花畑 (羽村市) 竹田 元子  
呼びかけに応えたくてか二度までも身を起ししかけ力尽きたり (久喜市) 長村 幸子  
おほらかにけむりを高くのぼらせてけふの営業を告げる龜の湯 (長野市) 原田 浩生  
土筆伸びべんべん草の揺れる春額の汗拭き直しゆく (神奈川県) 高橋 静一  
駅への道 歯科内外科のクリニック縁なく過ぎる幸せ思ふ (さいたま市) 石田 恵子  
鉄橋を渡る列車の音消してへりは山林火災に向かう (高崎市) 小島 文

【評】第一首、開墾して棚田を作ったのは何十年も昔のことだったのだろう。長い歴史を表現して、下句、みごと。第二首、春のはじめの自然と人事を簡潔に対比して新鮮。第三首、太極拳の昇段試験を受ける直前の気持ちのたかまり。

国連の八〇年の着地点戦火止め得ず安保理不能 (亀岡市) 俣野 右内  
戦争を「茶色」と書いた詩人もし今の世みれば何色と書く (春日井市) 望月 恵美  
就活の紺色スーツを求めたる渋谷西武の閉店ニュース (福山市) 倉田ひろみ  
開発の進む渋谷でただ一つ健気な「ハチ」の像のみ残る (川崎市) 宇藤 順子  
☆九条を変えたき者が九条の盾で防いだトランプの矛 (西予市) 二宮 和孝  
トランプの「自国ファースト」本当は選挙で再選狙う自が為 (東京都) 北條 忠政  
爆撃で今日も死にゆく人あれどニュースはカソリン優先の国 (五所川原市) 戸沢大二郎  
平和なればこそその品々棚充たす彩りゆたかな百円ショップ (札幌市) 新保弥代枝  
ゆく春のあるかなきかの風に散る桜花ほどしづけきは無し (逗子市) 織立 敏博  
我が腹に頭預けて寝る我が子しりと重いだけと幸せ (松戸市) 朝夷あかり

【評】1首目、国際平和の維持に貢献してきた安保理が、力を失いつつあることへの無念さ。2首目、中原中也の「幾時代かがありまして/茶色い戦争がありました」を踏まえた歌。3首目と4首目、変貌しつつある渋谷をそれぞれの視点から歌う。

そろつてるものは残せと妻が言い押入れに縛る「つけ義春全集」(大和郡山形市) 四方 護  
つけさんの絵は窓からの景色よと義春の女将目を伏す (宝塚市) 田中 威至  
日曜の遅い時間の地下鉄に同期三人喪服で座る (横浜市) 杉本 恭子  
「使わずに逝ったよ買ってあげたのに」母が無でてる祖母の雨傘 (奈良市) 小山寿美代  
☆九条を変えたき者が九条の盾で防いだトランプの矛 (西予市) 二宮 和孝  
戦争を八十年もしなかった「普通の国」はたつた八か国 (愛知県) 松崎 孝則  
もう一度言ってみたいよこのことは「おはようおかえり」「よろしゅうおあがり」 (高槻市) 福原よし子  
我がままを言へる相手であることがたぶん大きな存在のわれ (東京都) 大村 森美  
一軒に青大将一匹住む田舎梁から落ちる粗忽者おり (佐保市) 近藤 福代  
どつぷりと疲れた体を足だけが引きさるよう (東京都) 池崎富実夫  
に酒場に誘う

【評】つけ義春の死を惜しむ歌が多かったが、四方さんは大切な全集を縛って押入れに。田中さんは所縁の宿を訪ねた時一首。杉本さん、葬儀の帰りに、同期が口数少なく地下鉄に。小山さん、もったいないと使わなかった母の質素な生を思う。

川野里子選

佐佐木幸綱選

高野公彦選

永田和宏選

風信